

京都文教大学人間学研究所

2003年度公開講演会

「文明と野蛮」

開催日：2004年2月27日（金） 会場：京都文教大学

講演者：栗本 英世¹⁾

：野田 正彰²⁾

コメンテーター：松田 素二³⁾

：川畑 直人⁴⁾

司会：日野 舜也⁵⁾

日野舜也（司会）：

皆さんこんばんは。人間学研究所の公開講演会として、今日の司会をやらせて頂きます、人間学研究所所長の日野舜也です。よろしくお願いします。

この研究会は「文明から野蛮へ—20世紀を人間学する」というテーマで研究会を続けてきたんですが、昨年の春に三木亘先生という、私の東外大AA研時代の先輩なんですが、「世界史に第2ラウンドは可能か—イスラム世界の視点から」という、未開・文明・野蛮、と展開した世界史をイスラム世界から見るとい、こういう本を書かれた、三木先生をお呼びしまして、ここで昨年公開講演会を行いました。それを皮切りに、そういう現代の社会がいわゆる未開社会から文明社会に来て、その文明社会がこの20世紀に至りまして、非常に野蛮性を加えてきたというようなことを少し考えてみよう、ということでやってきたわけです。今日はその最後の締めくくりとして、京都女子大学の野田先生と、それから大阪大学の栗本先生、そして京都大学の松田先生、それに本学の川畑先生の4人からお話を頂くということに致しました。

栗本さんは、ずっと長い間、私のアフリカ研究の仲間なんですが、アフリカの戦争のことをずっとやってこられて、アフリカにおける戦争というのが、昔は槍や弓矢なんかの、そういう戦争もあったわけですが、それが20世紀になりまして、ヨーロッパから色々な武器が入ってくるようになりまして、非常に大規模で、かつ残虐性を増してくるというようなことについてのお話をお願いします。それから野田先生には、そういう戦争というようなもので起こされた災禍、そういうものが人間の心をどのように傷付けるのかという、そういうお話をして頂きたいと思っております。それでは栗本さん、どうぞよろしくお願い致します。

栗本英世「アフリカ内戦の〈残虐性〉」

大阪大学の栗本と申します。私はアフリカ内戦の、括弧付き〈残虐性〉、というタイトルで30分ぐらいお話したいと思うんですが。最初について最近耳にした2つの出来事についてお話したいと思います。私は先週始めから終末（2004年2月14日～22日）までスーダンのハルトゥームにおりまして、国際学会があつて参加してたん

1) 大阪大学大学院人間科学研究科 教授

2) 京都女子大学：当時 現：関西学院大学 学長直属教授

3) 京都大学大学院文学研究科 教授

4) 京都文教大学人間学部臨床心理学科 教授

5) 京都文教大学人間学部文化人類学科 教授：当時

ですが、その帰りに、先週の土日（2月21、22日）に、エチオピアの首都のアディスアベバに2日間おりました。そこから日本に帰る途中の飛行機の中で、ウガンダの反政府組織ですか、ゲリラ組織に、Lord Resistance Armyという組織があります。日本語に訳しますと、「神の抵抗軍」、「主の抵抗軍」ということになります。この人たちがウガンダの北部にある国内避難民のキャンプを襲撃して、200人ぐらいを虐殺したという事件。これは21日に発生したんですけれども、そういうニュースが大きく報道されました。日本でどのくらい報道されたのか、チェックしていないんですが。その前のアディスアベバにいました時は、エチオピア西部にガンベラ州という地方があるんですが、その州都であるガンベラという小さな田舎町で、昨年（2003年）の12月の13、14日に発生した虐殺事件について聞き取りをする機会をえました。この地域の土着の地元の人たちはアニュワ人というんですが、その人たち約400名が、エチオピアの政府軍と、それからアニュワ人から見ますとよそ者にあたり、エチオピア全体から見ますと、主流の優越した人たちである「高地人」に殺されたという事件があったんですね。この事件はインターネットなどで色々と報道されているんですが、要するに誰が殺したのかということが報道ではよくわかっていなかったんです。

私はアディスアベバの町で、幸いその虐殺の現場にいた4人の人と会うことが出来ました。このガンベラという所は私が88年から99年まで何度か調査で滞在したところですので、知っている人がたくさんいるんですが、そのついで4人の人に会うことが出来たんです。そして話を聞きますと、400人ぐらいのアニュワ人が、山刀と言いますか、スワヒリ語で言いますとバンガですね、それから石や棍棒を手にした高地人の群集、プラス、政府軍の兵士に殺害されたという話を聞くことが出来たんですね。この事件の場合は、無差別の殺戮というよりは、成人の男性が選択的に殺されて、女性や子供の被害というのはほとんどなかったんです。

つい最近、私が直接・間接に耳にした2つの

事件を最初にご紹介したわけですが、この十数年の時代というのは、脱冷戦期とかいろんな言い方が出来ますけども、アフリカのいくつかの国で新しく内戦が始まったり、それ以前からの内戦がまだ続いたりしています。現在の武力紛争あるいは内戦というのは、まず、紛争の主体が非常に多様化しているわけですね。一番単純で分かりやすい内戦は、ひとつの政府軍対ひとつの反政府軍組織あるいはゲリラ組織という構図です。実際にはそういう単純な形ではなくて、政府側も反政府側も非常に色んな組織に分かれていて、それぞれが絡まりあったり、合従連衡や離合集散して、内戦が進展しているという場合がほとんどなんですね。それで、そういった内戦では戦闘員ではなくて一般市民に非常に多くの犠牲者が出る。

次にスーダンの内戦についてちょっとお話しますが、スーダンの内戦は、現在の内戦は、すでに21年間続いていますけれども（2005年1月に包括的平和協定が調印された）、200万人以上が死んだといわれてるんですね。ところが、政府側、反政府側を合わせましても、総兵力というのはせいぜい20万人ぐらいなんですね。ですから兵隊さんが全部死んでもとても200万人には達しないので、死者のほとんどは一般市民なんです。その一般市民に対して略奪、レイプ、強制的徴兵、殺戮、それから極端な場合には、手足を切断したりすると。そういう暴力的な行為が蔓延している。今日の私のテーマはこういった、アフリカの内戦に見られるいわゆる残虐性と言いますか、野蛮性という言葉を使ってもいいと思いますが、それをどういうふうに理解していったらいいのかということを考えていきたいと思っています。

スーダンという国はアフリカの北東部にあります。配布したレジュメを見てください。この国は1956年に独立しましたが、72年からの11年間を除くと、ずっと内戦状態にあります。それは、普通にはですね、アラブ・イスラームの北部と、アフリカ・キリスト教／アニミズムの南部の対立だと言われるわけですが、現在進行中の内戦は21年以上続いています。レジュメの2

ページに行って頂いて、幾つかの残虐行為の犠牲者の証言というのを私のレジュメの中に挙げているわけですが、最初はヌエル人という南部スーダンの民族集団があって、その少年の証言ですね。最初ですので、ちょっと読んでみますが。彼は田舎の村で暮らしてたんですけども、11才の時に母親が殺されて妹が誘拐されると。で、ひとりで旅に出たんですね。インタビューされた時点では、ハルトゥームでストリート・ボーイをして生きている、と。

「僕は戦争による破壊から逃げたんです。アラブ人たちがお母さんを殺してしまいました。彼女はベンティウの町へ、ミルクを売りに行きました。何人かの女たちと一緒に帰ってきたところをアラブの兵隊たちにつかまってしまいました。『どこへ行くのか、どこから来たのか?』兵隊たちが尋ねました。情け容赦なく彼女らは座らされました。兵隊たちは彼女らを自分たちの妻にする（これはレイプするということです）と言いました。女たちは彼らが本気であることがわかりました。だから言いなりになって助かったのです。でもお母さんは要求を拒否しました。兵隊たちは大勢でした。全部で8人です。彼らはお母さんを縛って叩きました。叩き終わると後ろに置いとかれしました。他の女たちは行ってよいと告げられました。すぐに彼女らは銃声を聞きました。兵隊たちがお母さんを殺したことが分かったのです。彼女らは近所に住む親戚でした。彼女らは家に行っても何が起こったのかを話しました。僕たちはみんな、妹、弟、家にいた人たちはみんな泣きました。お父さんは60歳を越えた年寄りです。5ヶ月後、妹が、アニャニャⅡ（これはまた別のヌエル人の武装組織です）に誘拐されました。牛15頭も盗られました。その1ヶ月後、妹の夫が、SPLA（南部のゲリラ組織）と政府軍の銃撃戦の流れ弾にあたって死にました。その頃僕は残された中で最年長の子供でした。絶望していました。ベンティウの町（政府軍の本拠地）に行くのが恐ろしかった、恐ろしかったけど、家には何も残っていませんでした。それで、他にしようがなかったので、家と家族を捨てたの

でした。僕の頭はぐるぐる回っていました。いい場所はどこにもなかったのです。」

「町ではアラブの兵隊たちが僕を『彼らのボーイ』にすると言いました。したくはなかったけど、同意しました。彼らを食べ物をくれましたが、食べられませんでした。僕は疲れすぎて食べられないと言いました。僕の心は食べることを考える余裕がなかったのです。2週間の間、僕は彼らの服を洗濯し、使い走りをしました。夜になると、僕を妻にしようとさえしたのです。断ると彼らはとても怒って僕のことを『犬』『奴隷』と呼びました。こうした困難な目に遭っていたとき、マイケル・トゥットというヌエル人の行政官（政府側の行政官）が、ベンティウまでやってきました。彼は人々を助け、軍用トラックの荷台に乗せて、カドグリまで運びました。僕もそれに乗ったのです。

そこからたくさんの地域を旅しました。道中ずっと、アラブ（アラブ民兵のこと）が人々を強制的にトラックから降りさせました。夜には彼らの攻撃を受けました。ときには、トラックからひきずり降ろされ、お金をすべて奪われました。欲しい人間は連れ去りました。働かせる少年や、妻にする少女たちです。男たちといえば、アラブは彼らの耳をそぎ取り、餌として犬に投げ与えました。また、ペニスを切り取り、口に突っ込みました。女たちに対しても、とても悪いことをしました。夫の目の前でレイプするのです。あるいは、肛門でやったりするのです。こうしたことが、カドグリに着くまでずっと続けました。到着はしましたが、僕たちの人数は128人から94人に減っていました。カドグリでは、教会（キリスト教の教会）が、食べ物、服やその他のものを援助してくれました。」

その後、ハルトゥームに着くわけですね。88年12月に。で、ハルトゥームで、食堂のごみ箱から食べ物をあさったり、物乞いをしたりして、暮らしているということが述べられているんですね。ヌエル人というのは、内戦の影響を最も深刻に受けた人たちであって、そもそも内戦の原因のひとつは、彼らの土地で実施されていた2つの大規模開発プロジェクトでありま

す。ひとつは油田の開発、もうひとつは運河の開発ですね。そのために、政府軍、大衆防衛軍、これは政府側の、軍隊とは別の軍事組織ですけれども、それから民兵、それからまたそれとは別に政府軍の「友軍」である武装組織、の攻撃対象になり、またヌエル人自身が政府側と反政府側に分断され、しかもそれぞれがまたさらに分断されて争うということになっていたんです。

この少年の話は、シャロン・ハッチンソンというアメリカ人の女性の人類学者が90年代の始めにハルトゥームで聞き取ったものです。

『Nuer Dilemmas』という著書に収録されています。彼女はそれ以前に数年間、80年代にヌエル人の調査をしていて、ヌエル語もしゃべれますから、この話は信頼できるのではないかと考えています。この話に救いがあるとしたら、この証言、ナラティブの最後の方なんですけれども、このハルトゥームの路上で暮らしている子どもたちは非常にマルチエスニックな構成をしているんですね。そこに書いてるんですけども、ヌエル、デインカ、シルック、ヌバ、バッガラ、フル、フェラータ。で、この中でバッカラはアラブの牧畜民ですし、バッガラ、フル、フェラータというのは3つとも区分でいうと北部人なんですね。宗教的にはムスリムなんです。子供、ストリート・チルドレンのレベルではそういう人たちも一緒に身を寄せ合って住んでいて、かつ、この話ぶりから見ると、このヌエル人の少年も、なんて言いますか、人間としての尊厳というものを、まだ失っていない。かつ、翻訳はしませんでした。将来のことを考えて少しですけれども貯金もしている、ということを書いてるんですね。悲惨な話しのなかで救われる部分があるとしたら、そこかもしれません。

次に同じスーダンで、ヌバ人と呼ばれる、あるいは自称する人たちに対するジェノサイドの話を見てみたいと思います。北部スーダンにコルドファン地方という所があって、そこにヌバ山地という山地があります。そこに数十の民族集団の人たちがいるんですね。それぞれ小さな

集団で、異なる言語を話しますが、ヌバと総称されています。ヌバ全体では人口100万人ぐらいの非常に大きな集団なんです。この人たちは北部スーダンにおける最大の非アラブ・非ムスリム集団です。政府は彼らを解放戦線SPLAの支持者とみなし、攻撃の対象にしてきたわけですね。その内容は組織的・計画的な虐殺や、村の焼き討ち、略奪、政府が建設した「平和村」という非常に皮肉な名前の村があるんですが、そこへの強制移住、それから徴兵、レイプ、イスラム化などが含まれる。それはまさに民族的なジェノサイドといってよいものです。ここに載せた証言はロンドンに本拠を置く「アフリカン・ライツ」という人権団体が1995年に出版した『Facing Genocide』という本からの引用です。この情報はアフリカンライツの職員である南部スーダン人、ヨハネス・アジャウィンという人がヌバ山地に潜入して、被害者に直接インタビューした記録に基づいています。

(レジュメの)②は、17歳の女性が95年始めに自分たちの村が攻撃されて、「平和村」へ拉致された話です。そこで強制的な労働と、兵隊たちのセックスの相手を毎日毎日させられる。で、3ヶ月経ってそこから逃げ出すわけですね。逃亡に成功して、その翌日にこの調査者のインタビューを受けるんです。ここでわかることは、女性たちが平和村に連れていかれて、労働とセックスの相手をさせられた一方で、男たちは大衆防衛軍という、軍事組織へすぐ徴兵されるということです。ちなみに今日の「文明と野蛮」というタイトルに関係する話ですが、現在のスーダン政府はこうした上からの力によるアラブ化やイスラム化の政策のことを、「文明化プロジェクト」と呼んでいるんですね。ですからそこではアラビア語を喋らず、ムスリムでもない人は野蛮人であるという、そういうニュアンスがあります。

それからレジュメの5ページ目へ行きますと、今度は西アフリカのシエラレオネの事例を取り上げています。シエラレオネと隣国のリベリアという国は、特に残虐な内戦があったと報道されてきた2つの国なんです。ここは1991

年からRUF（革命統一戦線）という組織が内戦を始めまして、約10年間に渡って内戦状態になったんですね。残虐行為はRUFだけではなくて、政府側によっても行われてるわけです。最初、その5ページの下から6ページにかけて書いてあることは、「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」というアメリカとイギリスに本部がある、国際的な人権団体があります。そのこのウェブサイトに掲載された2000年の5月から8月までの間に革命統一戦線が行った暴力行為として報告されているものを列挙したわけです。

若者たちを捕らえて、兵隊や民兵に使うわけですが、殺害したりレイプしたり、あるいは手を切断するといった事例が語られているわけです。それから6ページに行きますと、政府側である民兵と兵士が、RUFの支持者とみなされた人々に対して行った暴力行為の証言なんですね。（レジュメの）③のアブという人の証言と書いてあるところですが、ここでは、家に突然その政府側の民兵と兵隊達が押しかけてきて、家族を殺したということが述べられているわけです。それから④の女性は現在は難民となって難民キャンプにいるわけです。シエラレオネの、隣の国ギニアへ脱出して。その難民となる前の話なんですね。ですからインタビューした時から数年前の話で、兵隊プラス市民が襲ってきて、反乱者、ゲリラの支持者とみなされた彼女と彼女の14歳の娘に、暴行したということが述べられております。

今ご紹介したようなスーダンとシエラレオネの事例は、いくらでも、大げさに言いますと際限なく、提出することができるわけですが。そういうものを読んですと、例えば、物理的な暴力や性的な暴力が無軌道と言ってよいほどに放置され、手の切断といった行為が繰り返される、シエラレオネの内戦は、混沌と無秩序の典型のように思えるんです。それで、私達はこうした極端ともいえる事例について、括弧付きですけど「野蛮」で残虐な暴力をどういうふうに説明し、理解できるのかという、最初の問いに戻りたいと思います。この問いを考える時に、まずその前提として検討すべきことがあるんで

す。レジュメには3つ書いてますが、2つ目からいきます。被害者の証言の信頼性の問題です。最初に紹介した証言はアメリカ人の女性の人権学者が記録したもので、後は欧米の人権団体の出版物からの引用です。一般的に言いますと、人権団体の報告書というものは、事実を誇張したりしてるということがないわけではありません。しかしここで私が挙げましたのは、私自身が自分のスーダンやエチオピアでの経験と、それに関する、例えばアフリカン・ライツやヒューマン・ライツ・ウォッチの出版物を照らし合わせて、相対的に正確である、信頼できると私が考えているものをここに挙げたんですね。私自身の基準によって選択した証言を挙げている、ということです。

それから一番最初の問題は、アフリカは野蛮な暗黒大陸だという先入観です。この問題は、特にアフリカのいくつかの国で、ここ10数年の間非常に激しく、犠牲者の多い残虐な内戦が行われていて、また経済的にはずっとアフリカは低開発で、いわゆる国際社会のお荷物になっている。そういう状況の中で、19世紀あるいは20世紀前半までのヨーロッパで考えられていた、アフリカは野蛮な暗黒大陸というかつてのステレオタイプが現代的に復活しているという現象があるんですね。ですからそういうバイアスがかかっているんじゃないかということも考えて、つねにチェックしなければいけない。

それから、3つ目は残虐性をめぐる特殊と普遍の問題です。現代のアフリカの内戦のある局面について、ぐっとフォーカスを当てていくと、こういう非常に残虐であると思える事例が出てくるわけです。しかし、ちょっと翻って考えてみると、だからといって現代アフリカの武力紛争、内戦というのが、特異に、特に残虐であると言えるのか、という問題がある。ひとつの立場からすると、すべての戦争というのはそもそも残虐なものだと。アメリカ軍がアフガンやイラクでやっていることと、ここで挙げた事例というのも、特に質的・量的に差はない、という考え方があると思うんですね。その問題はここでは措いておきますが、そういう

ふうにして注意深く選択していった後でも、やはり無数の残虐行為が行われているという事実は残るわけです。それを理解しようという時に、普通、人類学とか社会科学では、それを文脈化して、ある文脈において理解しようとするんです。その場合、歴史は重要な文脈のひとつですが、植民地化以降の歴史が多いんです。ということかと言いますと、植民地の国家というものがそもそも非常に暴力的であった。ヨーロッパ人がアフリカ人を支配する時に、警察や軍隊を用いて、要するに逆らうものは殺したり処罰したりして、植民地国家がつくられた。そういう暴力的な植民地国家のあり方というのは、独立した後も引き継がれる。警察や軍隊は植民地時代の特徴を引き継いだ。そういった文脈の中で、残虐性の問題を考えることができるという、ひとつの考え方ですね。さらに植民地時代以前まで遡る場合は、例えば西アフリカのリベリアとかシエラレオネの場合ですと、奴隷交易や奴隷狩りの暴力性までその説明を遡らせる場合もあります。スーダンでもイギリスの植民地化以前に、例えば19世紀の初めぐらいから、エジプトによる軍事的な進出があって、その時にも奴隷狩りや略奪というものが行われていた。そういう歴史的な文脈の中において理解しようという立場があります。それはある程度の、というかかなりの説得力があるわけですね。

そういう理解と平行して、例えば残虐行為にも経済的な合理性というんですか、目的合理性があるという解釈の仕方もあるんです。例えば兵隊達、あるいは銃で武装した人達が生きていこうとした時に、食べ物や物や女性を手に入れようとして、殺したり残虐行為をはたらくというのは、経済的な目的に適っているという説明になる。これは機能主義的な説明になるんですけれども。そういうふうに残虐行為を説明する場合もある。これも、ある程度の説得力があるんですね。

それからこういう内戦の状態は混沌と無秩序の、要するにカオスの状態であって、いわば万人の万人に対する戦いと言いますか、ホブズ

的な状態であって、そこでは個々人が生存のために力の限界まで闘争しているという解釈もあります。こうした問題は後で松田素二さんがコメントされると思います。新しい著書『呪医の末裔』の中で、個々人がエゴイズムむきだして生存のために闘争するという人間観について、批判的に論じておられますから。

ただ、ここで言っておきたいことは、確かに内戦の状態というのは混沌と無秩序ではあるんですが、スーダンの場合ですと、私が挙げた事例に限ると、いわゆる残虐行為というのは国がやってるわけですね。政府がやっているわけです。混沌と無秩序というのは政府や国家が崩壊し、公権力というのが存在しない状態で、人々は好き勝手なことをする、そういう前提があります。スーダンの場合は国家権力というのが非常に強くあって、それが多数の人々の意志に反してイスラム化やアラブ化を進めており、その下で残虐行為を行っているんです。ですから混沌と無秩序の中で行われているとは言えないということですね。それから例えばシエラレオネの場合ですと、これは国家ではありませんが、解放戦線や政府側の軍隊という組織された、権力を持った集団、軍事組織が、そういった残虐行為をはたらいっている。ですから普通の人が普通の人に対して誰彼なく残虐行為をはたらいっているわけではないわけです。そこにやっぱりよく注意しておかなければいけないと思うんです。

それからこういう内戦が長期に渡って10数年とか、スーダンは20年ぐらいですが、続きますと、社会の軍事化、ミリタライゼーションが進行し、暴力の文化、カルチャー・オブ・バイオレンスが浸透してくる。とにかく自分の意に従わない人は即、銃を撃って殺してしまう。それから武器というものが非常に広く行き渡って、組織化されていないような普通の市民といえますか、村の人々も武装している。そういう状況の中で、社会の軍事化や暴力の文化の中で、こういう残虐行為が起こっているということを押さえておかなければいけない。たとえ内戦が終わっても、平和というものを確かなものにする

ためには、社会の軍事化と暴力の文化というのは逆転させなければいけないんですね。リバーズしないといけない。つまり社会の脱軍事化と、暴力の文化の弱体化と言いますか、根絶と言いますか、そういう作業を経ないと平和というのは、平和協定を結ぶだけでは達成できない。これは重要なことです。

さて、話しはわかりますが、欧米の国々で、日本も含めて、多文化主義というお題目が唱えられているわけです。しかし、そういうスローガンが生まれるはるかずっと前から、アフリカの社会は多民族・多文化の共存ということを実践していた。それがアフリカの現代的な文脈で一番評価できるし、新たに再活性化しないといけない伝統である、という議論があります。しかし私が今述べたような状況を見てみると、多民族・多文化の共存というアフリカの伝統というのは一体どこへ行ってしまったんだろうか。それが回復するということは果たして可能なんだろうかというふうに考えさせられます。

こうした状況は、アフリカの独立以降の国家が、いわゆる近代的な国民国家の建設をちゃんとやっていないから、失敗したからこうなるという、そういう見方がある。「暗黒大陸」アフリカとも通じる見方ですが、その見方もある面で納得できるように思えるかもしれません。しかし、逆の方から見ますと、現在のアフリカの国家は日本なんかよりはるかに、国民国家の後に来るといって、脱国民国家の時代を先取りしている。たとえば、極端な例を挙げますと、軍隊というのは国民国家にとって一番大事な支配の装置ですね。それを例えば民営化することが起こっている。今では日本を含めて、国というのは色んな組織や制度を民営化してるんですが、軍隊と警察というのは最後まで民営化しない。アフリカのいくつかの国ではもうすでに軍隊とか警察をある程度民営化しているというのが現状です。それから国境の壁が低くなるという、国民国家の後の国家のあり方が、アフリカで先取りされています。こういう武力紛争の発生と、国境の壁の崩壊には相関関係があるという見方がある。これはある意味でシニカルな見方

で、そうしますとアフリカ以外の地域でも、脱国民国家の時代にはこういったような暴力的な状況が起こるようになる、ということになります。

最後にもうひとつだけ。こういった人類学者の記録や人権団体の記録に出てくる証言者というのは、ほとんど全ての場合、被害者なんですね。そこでは被害者の声というのは、ある程度正確に聞くことはできます。しかし加害者の側の声というのはなかなか聞こえてこない。そこには、加害者はやっぱり悪者で、被害者は全面的な弱者であるという前提があるのでしょうか。もちろん加害者から話を聞くということは難しいということですが。しかし現在の内戦の状況のやはり一番重要な点は、被害者がいつでも加害者になれるし、加害者がいつでも被害者になりえるということです。ですからそういう意味では、加害者の語りや証言に耳を傾けるということも、暴力、残虐性の問題を考える場合には大事なのではないかと思います。時間ですので、私からは以上です。

日野：

ありがとうございました。では討論とか質問は後ということで、まず野田さんに続けてお話をお願いしたいと思います。よろしく願います。

野田正彰「近代戦争の虐殺のトラウマについて」

私は近代日本の戦争と民衆の暴力という話をしたいと思います。日本は、ペリーが浦賀に来て以来、ひとつは帝国主義の支配を受けるのではないかという不安と、それからそれをバネにしながら帝国主義の中に入ろうとする、そういう葛藤の中で、国家形成をしていくわけです。その国家形成の一番大きなものは、ヨーロッパ列強に対して、いかにして文明の戦争を行うかということですね。野蠻の戦争ではなくて、文明の戦争を、いかにして行うかということが重要な課題としてありました。ご存知のように、例えば国内内戦の時の官軍の残虐性というのは

色々な形で記録されていることであります。例えば会津に入った官軍は、会津の人達を殺した後、1ヶ月以上にわたって死体の処理を許しませんでした。遺体が溝とかに落ちたまま腐乱していくのを、一切触らせないようにしたわけがあります。あるいは西南戦争における残虐な行為というのはずっと引きずっているわけで、それは日本の中世からの戦争の形態であったわけですね。そこには捕虜を取るなんていうことは全然考えられなかったわけです。戦国時代の戦争なんかはもう、今栗本さんが言ったのとほとんど変わらない戦争だったと想像されますけど、それに対して、いかにして帝国主義国家として外に出ていくために正義の戦争を行うか、あるいは文明の戦争というのをを行うかということだったんです。それが重要な課題になってます。

まず最初に、日清戦争を行うんですけど、この時に、戦争で勝つか負けるかという問題意識以上に、いかにして海外のマスコミ、ジャーナリストに対して、あるいは日露戦争になりますと、ジャーナリズムだけではなくて、外部の将官に対して戦争を見せるかということを行うわけですね。そこにはいかにして、野蛮な中国に対して文明の日本が戦争をしているかということを見せる、そういう面が非常に強く出ます。当時の日清戦争では、たくさんの記者を同行させています。そしてなんとか文明の戦争を今からやるんだということを見せようとするんですけど、いかんせん、そんな文明の状態ではありません。皆さんは旅順の虐殺をご存知でしょうか。よく知られているのは南京虐殺とか近年のものしか知られていませんけど、最初の戦争の時から、旅順での虐殺が起こるわけです。当時の日本の部隊は、総員で3万5千の大軍を構成するわけですけども、軍人軍属が2万5千、あと1万は大八車などを引く軍夫なる男たちが占めているわけです。軍夫というのはヤクザその他が駆り集めた人達であります。それがぞろぞろとついて、入って行くわけです。で、兵站もほとんどまだ、というか最後まで太平洋戦争は兵站ができないままですけども、兵站という

のは食料とか、それから物を運んだり、武器弾薬その他を運ぶのを兵站と言います。日本軍では、兵站は、一番軍隊の位置で最低の位置に置かれて、出世ができないポジションであります。そういう状況の中で最初の戦争は行われました。

こうして、観戦の記者達を前にして、果敢に戦うように見せます。だからその当時のアメリカのジャーナリズムを広く見ますと、なかなか思うとおりに評価してくれていて、喜んでいる記述がたくさんあります。例えば、これはワールドという新聞の記述ですけども、こんなふうに書いてあります。日本は、朝鮮の解放者であると。それはなぜかという、中国側は兵士個人はなかなか勇敢であるが、彼らの勇敢さは懸賞金のためだと。日本兵を屠れば、懸賞金がもらえるのです。あるいは逃走の際は軍服を脱ぐなどして、近代戦争のルールをわきまえていない、ということを書いてあります。それから一方では、日本軍には敵の負傷兵が多く、危険を冒して救助したり、捕虜にタバコを与えている場面が見られるとかですね。そういった文明の軍隊を装っているという評価です。こういう文章が出ているんだけど、実際は、その傍ら、大変な虐殺が行われてしまいました。いわゆる旅順における虐殺というやつで、日清戦争の11月の18日ぐらいから戦闘の後にですね、掃討に入って、旅順が陥落後、21日に旅順の市街に入って行きます。そしてたくさんの兵士達が、包囲した後、虐殺をずっと行っていきます。で、ここではやはり捕虜を取るっていう発想が、当時の大山元帥の軍隊の中に基本的にはきちっと入っていなかった。これは数は、今はもう古いですからわかりませんが、一応、2万人の中国側の人達が虐殺が死因となっていたとされているわけです。で、日本側はまだ盛んに、ハーグの陸戦規則は1899年ですからまだ国際法としてはできていないわけだけれども、しかし建て前上はですね、いかにして文明の軍隊であるかということを西洋の記者の前で装うかということを盛んに強調していきましてし、旅順の虐殺のあった後も、なぜ行われたかという

追求までを行って、その釈明を求めるとか、それなりの軍の対応をしております。

しかしここでですね、日本の近代における戦争はまず出発から2つに割れていたということを確認しておきたいと思います。つまり内に対してはですね、旧来の虐殺・略奪を欲しいままにしていくという面があった。一方、外というのは、ヨーロッパ列強に対して、文明の戦争を装う。つまり外の目がない限りは、内の戦争を引きずるという、2つの二面性を持って日本の近代の戦争が始まっていきます。

日清戦争の後、講和条約で台湾に入っていきます。台湾が植民地になりました。当時の日本軍は、占領するんだから簡単だと思って入っていきます。入って行くんですけど、基隆から入港して行くんだけど、台湾の人たちから見ると、侵略軍ですね。そういう自覚はほとんど日本軍にはありません。そこで最初のうちは抵抗はないんですけど、台北に向かって進軍して行く中で、反撃が出てきて、そうなるともう後は滅茶苦茶な虐殺の状況が起こるんですね。その後の台湾の支配を形作っていきます。ちょっとしたことをきっかけに、村、その他を虐殺する。そこでは敵に通じていると疑うと、非常に不安になって、全部村人を殺すとか、そういった形態が常態化していくわけです。台湾の支配が1895年からですけど、それ以降も、ずっと同じような虐殺が続いております。最後の抵抗は1930年ぐらいになるんですけども。もうだいたい、先ほど栗本さんが言ったのとほとんど変わりはない、残虐な戦争をずっとするんです。そこには意識として、他者の目、ヨーロッパ、欧米の目がある時には文明の戦争を装う。しかし内、つまり文明化されていない人間に対しては別の基準、これまでの戦争基準を使うという、そういった二面性というのを日本の軍隊はずっと持っていたわけでありました。

かつ日本の軍隊は二面性としては、まず兵站がほとんど行われていませから、食料は基本的に現地調達ですね。例えば、盧溝橋事件の後、上海事変、そして南京に入っていくのですが、あれもご存知のように、文明の戦争とは言

えない。東京の司令部から南京を落とすという指示が出てるわけではないですから、上陸軍隊が競争して南京に突入したという作戦無視であり、東京はそれを後から容認するのです。ただそこには兵站はほとんどついて行きません。それから先ほどの日清戦争を始める時に、非常にたくさんの正体不明の軍夫をぞろぞろと引きずってる軍隊であります。そして最後まで、例えば日本の軍隊はトランスポーターのための自動車の整備が遅れまして、こういった内なる戦争を引きずっていたという面があると思うんですけど、あくまでも軍は馬に乗って戦うという姿勢が強くあります。将校は馬に乗ってる。南方戦線でも、ほとんど痩せこけた駄馬を徴兵してですね、運んでいくわけです。記録を見ると、なんか集めた、もう痩せこけた馬で行くんだけど、皆南に行ってですね、病死していくという、そういった状況がたくさん起こっています。で、こういう兵站がほとんど行われないうまま、内においてはですね、捕虜を取らないでの虐待、現地での調達。それで外に向かっては、いかにして文明の戦争を誇示するかが行われます。南京虐殺においても同じです。皆さんは南京虐殺の記録を読まれたかと思いますが、外国の目がない時について日本軍が行ってることですね。それに対して西洋のマスコミに知られることをいかに恐れていたかということが、ずっと記録に載っていますけれども、そういう二重性を持ちながらこの戦争をずっとしていくわけです。

そこで、こういった内と外での戦争の意識のズレというのは、日本にそういった侵略戦争をした人間、あるいは軍隊そのものが帰ってきたとき、日本国民に対してもまた二重性を持って関わっていくという面を持ちます。国内へ帰ってきた人間は、家族とか周りに対して、表向きは、戦争は正義とはいえませんが、一応正当な戦いをやったように装うわけですね。敵が武装をして、自分もまた武装をして、そこで戦ったという。新聞なんかを見ると、非常に多くの差別語が書かれてありますが、彼らがいかに勇敢にチャンコロを、中国人を殺したかと

か、首を切ったとか、そういった物語がずっと続いている。しかし今でもそうですけど、それぞれの軍隊から帰って来た人たちの行く軍人の会議では、これは内での話になります。これは私は入れてもらってないけども、そのような会に行った人たちが言うことには、当時の戦争での反社会的な行為をある程度自慢するということも行われていたと。内と外が、内地に帰ってきてからも続いていくわけです。内に向かって、ウチに帰ってきててもこういったことが行われている時にですね、彼らは戦地で行った残虐な行為をどう受け止めていくのでしょうか。

彼らの多くは、農村で育った、日本人です。そこには村社会での最低限のモラルというものが小さい頃から身に付いているわけです。人を殺すとか、物を盗るとか、放火するとかですね。そういうのは基本的にモラルとして小さい時から身に付いています。親からも言われ、周りからも言われ。そういった社会観と、戦場で行ったことの極端なズレがあるわけです。本来、外の基準でいってる限りはズレはないはずです。外の基準でいってる限りは、敵も武装し、こっちも武装して、勇敢に戦ったということですから、ありません。しかし現実は大きなズレを持っています。

私の方からちょっと一例だけ、ズレを意識した、非常に数少ないお話をちょっとだけしましょう。栗本さんの場合は被害者の話ということですが、比較的私は加害者のインタビューをかなりしてるんですけども、つい先週、用があって、岐阜県の高山に行って、久しぶりに尾下大造さんに会ったんです。この方はですね、飛騨の尋常小学校を卒業して、それで林業を手伝っていた、いわゆる日本の学歴のない典型的な青年であります。彼は1940年の12月に18才で陸軍に志願します。その時の意識としては、いずれ軍隊に入らなければいけない。早く行けば早く帰れると思っている程度であります。そして軍隊とはどういう所かというのは、彼にとっては、戦争とは鉄砲を持った者同士の撃ち合いのはずだから、日本の軍隊と中国の軍隊が華々しく戦い、勝った方が有利な要求をし、自分の

権益を守るように確約をさせて、終戦になると。この程度の認識で彼は行くわけです。そういった彼が行った戦場はそうではありませんでした。例えば、しょっちゅう掃討に行った。中国側の兵士に協力している集落があると通報を受けると、情報提供者にお金を渡すことになっているから、色々な通報が来ると。あろうとなかろうと、そういう通報が来ると。通報が来ると、その集落に行くわけです。行った以上はですね、必ず成果をあげて来なければいけないんですね。それから報告書を出すわけです。戦利品何個、とかですね。敵の遺体、敵を何人殺した、とかですね。そのために、いい加減な報告書をいかにして作るかということでもあります。そうして行くんだけど、もともとそんな通報が正確なことはありませんから、敵はいない。敵がいないとわかった上で、個々の家を調べに入る。で、中国の家っていうのは隠れ家がありますね。そこに入って、少年兵の彼は、最初戸口に立たされて、そして古参兵2人が家の中へ入って行く。もったいぶって、どうも中がおいしい、俺がもういっぺん徹底的に調べる、お前は外をしっかりと守っておれと。安全であることを確認してから、こう言うわけです。で、ある時は、17、8と、二十歳の女の子が、姉妹だったと思うんですが、大柄な娘が出てきた。おばあちゃんが土下座して頼んでいるのを横にいた兵がいきなり殴りつけて転がし、古参兵が二人を連れ出した。で、部落に火を放って帰路につき、二キロほど行ったところで休み、好きなことをしてこいということになった。順次にお前行ってこいと言われて女の子を隠した物陰に消えていった。お前も行けと何度も言われたけれども、とんでもないと尾下さんは思ったわけです。最後に姉妹は行けと言われて、急いで逃げていったと。こういうエピソードから、彼は、非常にリスクなことをしています。日本の集団の中でですね、少年兵が強姦に協力しなかったら殺されるかもしれないとか、それなりの制裁を受ける可能性が高くなります。彼は、そういうことがずっと続いていくわけです。その中にはこういった犯罪を、常識的にやる人間が幅を

利かせているというわけです。例えば、無差別の殺人行為を見る場合もあると。掃討に出た時に、川の中の葦原に20人ほどの女子が隠れて、避難しているのが見えた。ところがそれを1年上の上等兵がいきなり機関銃で撃ち始めた。たちまちなぎ倒されて、アイヤ、アイヤと叫び、地獄絵となったと。尾下さんは、後輩の一等兵であって、とても叱責できる立場でなかったが、何をするんだと言ったと。そうしたら、やってる方はですね、ムカムカしたからと。ムカムカしたのでやったと。まあこういった、20人殺傷の理由をですね、ムカムカしたのでやったということです。あるいはああいった所ですね、日本の軍隊は子供教育程度ですから、梅毒になると、大脳を食べると治ると考え、中国の人の頭蓋骨を割って、大脳を焼いて食べた。そういったものはもう何度もあります。まあ、きりがないのでやめますけども。

彼はこういったことを通してですね、これは軍隊ではない、と考えます。これは強盗・追いはぎの集団であって、自分の思っている軍隊ではないということです。そして彼はその後ずっと苦労しながらベトナムの戦線、フィリピンの戦線を耐えて、生きて帰ります。で、彼は日本の軍隊の中で非常に稀な人であり、その後、軍人恩給を拒否しました。今私が知ってる限りで軍人恩給を拒否してる人というのは、彼以外に知りません。反戦運動をやっている人でも、軍人恩給を拒否してる人はいません。つまり彼の論理では、あれは軍隊ではなかった、強盗・追いはぎの軍隊が恩給をもらうというのは許されることではない、ということです。

軍人恩給についてちょっと言っておきますと、敗戦後日本は、一時、米軍の意向で軍人恩給が停止されます。軍事恩給っていうのは、例えば戦場に行って、中国の戦線に行くと、1年分が4年分に計算されます。そういった形で4年も戦場に行けば、16年で恩給が付くということです。そして、かつ天皇制のシステムですから、天皇に近いポジションにあった人ほど、恩給の額は高くなります。膨大な恩給が支給されていくわけですし、将軍クラスの人は今も、日

野先生のように長生きされているとですね、おそらく2千万近くの恩給をもらうというわけです。それくらいの額がずっと出続けていくわけです。あるいは遺族会にもお金が出るんです。こういったことをサンフランシスコ講和条約以降、日本がいち早く1950年になって復活させていくわけです。

彼はそういった恩給に対して、自分は兵士として戦争に行ったんじゃないくて、強盗・追いはぎの集団の一員であったと。それに対して、恩給をもらうことはできないということを意思表示します。そのために、ものすごいいじめにあい続けます。未だに、ハンコだけ押せていう村社会の中で、お前は嫌だったらもらったお金を村に寄付すればいいじゃないかとか。軍人恩給をもらわないということは、お国のために戦った人間を否定することになるから、そういうことをするのはアカのすることだから良くないっていうふうにはですね、家族にまでずっとこう言われ続けて、戦後の50数年が経ってます。そういった1人の例ですけれども、稀有な人ですね。戦争の中での二重認識を、拒否して生きようとしたというのは、非常に稀有な人であります。

国内においても、私達のように戦争に行かなかった人間には、この外に向かったの文明の戦争というのを徹底的に信じていっているわけです。日本軍がどんなことをしたかというのは、内地にいる遺族とかそういった人は全然わからないと。わかってもわからないふりをしてるという面もあるんでしょうけども、現実には知らない、ということですね。そういった日本の国内において、国民の意識が、ガダルカナル以降、悲惨な敗戦に向けて突入していくわけです。そして爆撃を受け、自分達も戦争の犠牲者だという意識を強く持ちながら、敗戦に向かって進んでいきます。その決定は広島・長崎でありました。

国民によって身体化された戦争、身体の中で参加した戦争の認識というのは、お国のためにということで、スパイには気を付けろとか言い、そして涙ながらに悲痛な思いを胸に秘めな

がら、外では日の丸の旗を振って、赤紙で自分の家族を送り出した。これが参加した戦争であります。体験としての戦争であります。そういった戦争の中に生きた日本国民は、1931年の柳條溝についても、中国は恩義を忘れて謀略をはたらい、ああいうことをしたと。そういうふうに報道されていますし、そう認識しています。あるいは1937年の盧溝橋についても、同じように、中国が不当にも発砲してきて、それに対して果敢に日本軍は反撃したという、そういう物語として伝えられている。そういった戦争の国内における認識というのは、先から言ったように敵が悪であって、文明の戦争を行っている、正義の戦争を行っているのであって、日本軍は果敢にも反撃に出たと。そういった物語が認識され、頭の中に入っているし、そして敵の謀略に反撃するものとして、自分達の家族が戦争に行き、日の丸の旗で送り出し、あるいは帰ってくる時、旗で迎えた。それが参加した、身体化された戦争であります。

こういった身体化された戦争が、敗戦を経て、戦犯裁判が行われます。戦犯裁判の中で、日本軍の残虐行為が部分的に報道されていくわけです。今まで全然知らなかったことが報道されます。例えば南京虐殺も報道されます。正確ではありませんけど、報道されるわけですね。そういった時に日本国民はこういった残虐な行為をどう受け止めていけばよかったのかと。まず、そういう形で出された時に、それは戦勝国の側の作り話であるという受け止め方もあります。あるいは誇張されて言われているんだろうというんです。しかしまあ、やっぱり事実かなと思うわけです。しかし体験的な話としてこういった残虐行為というのは入ってくるわけではありません。身体化されたレベルでは正義の戦争をやって、そしてそこに参加していった自分があるわけです。旗を振った自分の身体がある。体験としての戦争があります。それに対して部分的に入ってくる戦後の事実というのは、その時はちょっと困ったなと思うわけですけども、意識の中では、少し時間が経っていけば、知識は全体として修正し、反省することができ

ない限りは、排除していくということになります。色々な記憶は戦後、様々な形で、新聞を通して国民に入ってくるわけですけど、常に部分的に入ってきて、それを身体化された戦争が否定していくということの繰り返しをしてきたと思われる。

で、入ってきた事実は、いろいろな形で不都合であります。正義の戦争をやってきたはずの日本軍が、そうではないということがいろんな形で告発されることは不都合であります。とりわけ1980年代になって、南京虐殺だとか、あるいは731部隊の問題だとか、あるいは慰安婦の問題が出されていきます。そうになると非常に不都合ですね。とりわけ例えば慰安婦問題が提示された時は、日本の男性に、正義の戦争、近代における正義の戦争から見て、日本軍は強姦兵であり性奴隷を引きずりながら歩いていたと言われまして、大変苦痛であります。性のモラル、彼らの持っている建て前のモラルがひっくり返されることでありまして、虐殺をしたということ以上に、過剰に反応していきます。そういったことが従軍慰安婦問題を通して、新しい教科書をつくる会とかが躍起になって作られていくというのもそういうことでありました。731部隊とか南京虐殺以上にですね、従軍慰安婦問題は重要な問題になって入ってくるわけです。そこで徹底して、そういうことはなかったと否認を行うことによって、断片的に入ってくる事実を排除していくということです。同時にそういった断片的に入ってきたものを、国民の多数は忘れ去っていく。健忘によって忘れ去っていくとします。精神病理学の言葉では、こういうふうな新しいショックな体験が入ったときに、その前後を含めてその所だけをぽっと忘れてしまうのを、後発性健忘って言います。そういったメカニズムを盛んに使いながら、排除していくことをしていきます。

しかし80年代に入ってから、こういったことは、絶えず提起され続ける状況が起こっています。毒ガスをやったこととか、そういったことが色々な形で提起されていくわけです。基本的に中国政府が取ってきた立場は、これもご存知

のように、いわゆる国家の形成のために、過去の戦争については敵の残虐性を強調して、怨念を強調し、それから自分たちの英雄的な行為とか、誇りを強調する。怨念と誇りを強調していくということを政治的な手段として行います。中国の共産党政権が取った手法は、こういったことの危険性の中で、非常に政治的な方法をとりました。それは日本の戦争は、一部の軍国主義者によって行われたものであると。多数の日本国民は、それに惑わされたのであるということ、中国国民に対しても教えるし、対外的にもそういう姿勢をとります。だからA級戦犯に該当するような人だけを戦争責任の問題にして、そして日中の友好を作ろうというのが彼らの戦略でありました。しかし日本の側は、そういった戦略に必ずしも乗り切れないところがあります。これはもちろん嘘の話でして、一部の軍国主義者によって行われたのではなくて、交戦国民全体が近代を作って行って行ったわけです。けれども、それをそういうふうに政治的につくられようとしていることについて、自民党政権の中でもそういう動きを示すのは80年代までは比較的主流派でしたけども、その後の若い世代、小泉首相とか、そういった人たちはほとんど訳がわからなくなって、アジアにおける本当に政治的な戦争認識の了解を踏みにじるような形で、現在の靖国問題とかをずっと行っているわけです。

いずれにしても、色々な問題が提起された時に、系統的に自分の体験を修正するという作業をしないできた私達は、健忘と、それから否認を盛んに使いながら来て、そして80年代の後半になってもはやそれが不可能になっていくと、新しい物語を作ると。作話（さくわ）ですね。新しい神話を作ろうという動きに出ているのが現状であろうと思います。部分的修正をやっているんですね。系統立てて日本の栄光の歴史をもう一回紡がなければ、というのが現代の動きでありまして。これは内と外という、正義の戦争が引きずってきた略奪、強姦その他をしながらの戦争、そういったねじれを引きずりながら敗戦に至った日本が、今の平和な状況で築いて

きたひとつの戦争認識をどう捉え直すかという現状であろうと思います。

片一方ですね、戦争の中で、非常に少数の人たちが自分の道徳に反する容認できない行為に対して精神的な傷を受ける人がいました。これは日本の場合非常に少数であります。この戦争における精神的外傷の研究というのを私はずっと研究テーマとして来たんですけども、欧米の戦争の記録と比べて、日本は極端に少ないんです。ベトナム戦争においても、あるいはアフガンのソ連軍の兵士達の侵略を見ても、多くの兵士達が自分の行為について非常に強い精神的外傷を負っています。

一例だけ、昨年行った韓国におけるベトナム参戦兵士のインタビューを皆さんに紹介しましょう。彼は53才です。30数年前のベトナム戦争に参加した海兵隊の1人です。私は、韓国でも、直接インタビューした人はたった3人しかいません。ほとんど名乗り出ませんから。ベトナム戦争における韓国軍の虐殺について彼は語ってくれました。

まず海兵隊に入った経過ですが、彼は子供の頃は幸せだったが、父母が亡くなり貧しくなったと。兄と姉がいたが頼るわけにもいかない、住む所もない、とにかく犯罪を起こしそうな気持ちだった。そしていつかは兵隊に行かねばならぬ、どうせ行くなら早く入ろうと思って、1965年、18才で海兵隊に志願した。11倍の倍率で、海兵隊は他の兵とは違って、志願制なんですね。倍率は高いわけです。そして韓国軍は、日本の旧軍の文化をそのまま引きずってきました。日本軍は一応敗戦して、いろいろ虐殺したということで、ちょっとの間、自衛隊が作られるまでは否定されましたけど、韓国の軍隊は日本軍がそのまま、戦勝国の軍隊に変わりました。そういう意味では、日本軍の内部兵のいじめ文化をそのまま引きずっていきます。韓国兵の中では、軍隊に入ってから殺害、自殺も非常に多いですね。例えば僅かな所に30人ぐらいで山なりになるリンチだとか、様々な内部犯的リンチがついこの間まで行われているわけです。そういう非常に極端な内部暴力が、海兵隊

では最も強い所です。鍛えるっていうんですかね。

そこに入って、彼は帰る理由もないので我慢して、そしてベトナムに行く時には第5中隊に入られます。そして戦場に行くわけです。小隊の兵士は殺気立っていたと。地雷の近くです、重いLMD銃250発弾を持って歩いて、最初の銃撃で怯えて、重い銃を持って逃げ出した。で、テントを張って木の枝葉でテントを隠して偽装すると。枝葉を取ろうとして射殺され、3人が負傷した。前任兵は殺人鬼といわれる男で、怒りのためか逃げ遅れた村人を射殺すると言った。20数人の女、子供、老人を15mほどの爆撃地の窪地に追い込んで、いわれるまま手榴弾を投げてその後射殺した。土ぼこりが収まると泣き声が聞こえた。少女がわめいていた。顔があった。銃で撃った。頭の中は真っ白で何も感じなかった。3人の負傷兵をヘリで送った後、テントに戻って1人で寝ていた。外はしとしとと雨が降っていた。夜中に目を覚まして外を見ると少女が立っている。無表情で立っている。目をこするといなくなり、また現われる。夜明けまでよく眠れなかった。こういう形でですね、侵入性の体験を彼は持っています。

そして最初の虐殺の後、中隊本部付となって、小隊が村に入った後、逃げる者を射殺する。残った村人を殺すかどうか、中隊で決める。村人はそのまま放免できないということで、すね。兵隊の様子を伝えることがあるので、すぐ殺すということで。彼はいつか自分は死ぬだろうと思っていた。殺すことをなんとも思わなかった。何十回村人を殺したことかと、ということですね。例えば報復だといって、日本人は首を切りましたけど、韓国では自動小銃で首を切断して、皮だけ付いた首を腰にぶら下げて歩くのを誇る、とかですね。そういったことをしながら帰ってくるわけです。

しかし彼はそうした侵入性の体験が時々出てきて、抑圧になって不安定になる。復員して以降、職を転々とするけども勤まらなくて、酒に溺れ、暴力を振るい、ヤクザに入り、これではいけないと思って抜け出そうとしたら抜け出せ

ない。何をしても上手くいかなくて、人間関係に苦しむわけです。こう、ベトナムのことが頭に入っていると。ずっとこういう形で、自分の行為の中に、引きずりながら不安定な状態にある人なんです。

こういった事例は、今たまたま韓国で言いましたが、ベトナム戦争に行ったアメリカ兵とかオーストラリア兵とか、非常にたくさん報道されていますけども、日本兵の場合はほとんどありません。関東の千葉県国府台に、精神神経患者を集める陸軍病院を日中戦争の始まった頃に作りました。そして進行性麻痺とかですね、精神的におかしくなる人を、日本兵はたくさん内地に帰して、そして診断して除隊するということをやっておりましたから、膨大なカルテがあります。たまたま地中に埋めて残されていたわけですし、多くのカルテがありますけども、そういったカルテを見ても、ほとんどこういった残虐行為が幻覚になったり、脅かされるといった記録がほとんどありません。私の本の中で、8千のカルテの中で、2例だけあったのを紹介してありますけれども。

というのは結局、日本兵の場合というのは、徹底して自分の個としての残虐性というものについて、先ほど言いましたように二重のオリエンテーションを、きちっと持って、そしてある刺激があった時には、一方のオリエンテーションだけを提示する。それは自動的に行われる。片一方の場面において、その内部の戦争としてのオリエンテーションの中にそのまま生き、そして外からの眼差しの時には外のオリエンテーションにぱっと使い分けるといいますね、こういった構造が日本の戦争文化の中で植え付けられていったと。内部犯における戦争の教育、内部で徹底していじめ抜いて、そしてこんなに酷い軍隊にいるより早く死んだ方がましだと思わせる。そして外に出ていって、死ぬことがわかっているんだから、こういうことは当然であると言い、そして捕虜を取らない。そういった文化の中で、ダブルオリエンテーションが進行していったと思われます。個々の兵士達の中で2つの使い分けが行われていた。その使い分け

によって傷付かないという精神構造ができていったのと同じように、近代日本の戦争観も、文明の戦争を装うことによって内部の、実際に行った戦争を完全に否認するという、そういう使い分けを国全体で持ち、文化にして、それを生き抜くという姿勢が強く出来上がったのです。

戦争の中でそういうインタビューを聞いていると、今の韓国の兵士のような形で、私達は鬱状態になることもできますし、感情の葛藤を持つこともできます。しかしこれを内と外という形で、徹底的に外在化し、二分化して、片一方の刺激に対してはこっちを装い、片一方の刺激に対してはこういうことを装うということによって、感情は鈍麻していきます。そういった感情鈍麻の文化を引きずりながら、ずっと戦後、それが修正ができないで来ていると言えます。

時間になりましたので、最後に、1人の若い世代、皆さんと同じ世代の人がどんな意識でいるか、ちょっとだけ紹介しましょう。これは京都大学でやった総合講座のときに取り上げた『戦争と罪責』（岩波書店）の本についての感想文の1つです。ある女子の4回生が、こんなレポートを書いてきました。彼女は、冒頭で非常に真面目にこう書いています。今までいくつかのレポートを書いてきたが、今回ほど悩んだことはなかった。今までのレポートにおいては、教育問題を語るにしろ、女性問題を語るにしろ、それはどこか自分と離れたところにある問題で、第三者的な立場から考えることがほとんどだった。しかし今回この本は、私を第三者的立場に立たせることを許さなかった。私はいわゆる日本型優等生として生きてきた。親の言う事をよく聞き、先生に誉められるようなことを進んでやり、成績も良く、悪いことに手を出さなかった。先生や親の前での発言は、いつもいかに誉められるかを意識し、彼らの期待通りに振る舞った。一生懸命勉強し、京都大学に合格した。大学に入ってから考え方も以前とそれほど変わらない。レポート課題があれば教授の考え方への賛辞を述べる。授業中に教授から

質問されれば、必死に教授が期待する答えを探す。そういった私が戦争の罪を読むことは非常に辛い作業である、と。自分の全人格を否定されているような気がして、また過去、自分と同じような優等生型の日本人が犯した残虐は、読み進めるのに非常な努力を必要とするものだった。自分のような人間が世の中に生きていること自体が悪なのではないかとさえ思った、と。非常にこう、過剰にコンプレックスを持っているんですね。これが私が言った、日本の、今言った二重構造の中における精神の病理だと思えますけども。

そういう前置きを書いた上でですね、彼女はこうも言ってます。例えば、手術実習について日本の医学全体が731部隊とかの告発で終わってますけども、日本の軍医たちは中国の農民を憲兵からもらって生体実習をしておりました。銃の弾を撃ち込んで、生きたまま弾を取りだすとか、臓器を取り出したりしていたわけです。それを告発した医師もいます。それについて彼女はこう言ってます。例えば生体実習に中国人捕虜を使ったという一節があったが、それを読んで私はうっすらとではあるが、便利でいいと感じた。この本の中で厳しく糾弾され、否定されているのは、まさにこのような考え方だろう。この便利でいいという意識は、どうせ敵地だから殺すんだ、と。だからその身体を使うことは便利でいいということですね。便利でいいという意識は、いくら消そうとしても私の中から消えなかった。それだけ自分の中に染みついた、効率重視から来る残虐性だった、ということですね。

現在、私達が近代の正義の戦争というのを装いながら、何を引きずってきているのかをいったんお話ししました。

日野：

ありがとうございました。時間もだいぶ迫ってるんですが、ちょっと5分ぐらい休憩をしたいと思います。そしてその後、コメンテーター、それぞれ10分か15分、ということでお願います。

コメント・質疑応答

日野：

それでは再開します。まず松田素二さんのコメントをどうぞよろしくお願いします。

松田素二：

松田です。実は私も、明後日からアフリカへ行くんですけれども。この2年ほど栗本さんと共同で難民の基礎調査というのをやっていて、この間ずっとお話を聞いているのが、20代前半の女性です。彼女はルワンダの難民なんです。ルワンダというのは、94年の4月からわずか数ヶ月の間に、70万から100万人の人が殺されたという、大量虐殺があったところです。人口700万人の小さな国ですから、その1割以上が殺される。そして生きのびるために、200万人以上の国民が難民になった。そういう経験をしたところです。ザイル（現コンゴ）の難民キャンプに自衛隊が平和維持のために派遣されたことでも知られています。

そこで私がインタビューしたルワンダの女性は、自分の両親と兄弟を殺されるんですね。彼女はその虐殺で両親を殺されている間、畑に逃げていました。しかし捕まってしまう、3日間ほど監禁されてしまう。

彼女は、お父さんがツチという民族で、お母さんはフツという民族です。ルワンダというのは1962年に独立しますが、フツ人の人達が人口の8割以上を占め、政権を執る。ところが94年に政権がひっくり返って、ツチ人の政権になる。その混乱直前から、当初はフツ人の民兵によるツチの人達の虐殺、それから、ツチが政権を執った直後ぐらいからは、今度はその報復で、ツチの人達によるフツの人達の虐殺ということが起こるわけです。

それで彼女はお父さんがツチですから、当初はフツ人の民兵によって殺害されます。そのあと、ツチ人の政権になった後は、彼女の夫がフツ人でしたので、今度はその夫が迫害の対象となって失踪します。おそらく殺されたと思うんですけれども、わかりません。それで彼女は歩

いてずっと逃げてケニアまで来るんですね。

2001年8月に私が初めて会った時のナイロビは非常に寒いときでした。もうセーターがないと暮らせないようなところなんですけれども。そこで彼女と子供は、国連の難民高等弁務官事務所（UNHCR）の前で路上生活をしていました。コンパウンドに入れないので、その周りに野宿をして、半年ほど暮らしていたんですね。私は彼女自身の被害については詳しく聞くことはできませんでした。聞かなかったんですけれども、彼女が見たことについては色々聞きました。言葉にできないほど残虐なことが起こっていたようです。

例えば先週、ウガンダの新聞で見たんですけれども、ある男の人が有罪になったという、そういう記事がありました。それは自分の妻の両親を殺した罪で裁かれました。ルワンダのことです。その男の人は、妻がツチ人で、彼自身はフツ人でした。当初は、フツ人の民兵がツチ人を見て殺すんですね。ですからツチ人の妻の両親が逃げ回って、自分の娘を頼って、そこにかくまってもらいに来たんですね。ところが密告があつて、フツの民兵がやってきて、家捜しをしたので見付かってしまいました。それで民兵たちは義理の両親を、その娘の夫に射殺するように命令するわけですね。当初は山刀で首を切れと言われて、彼はそれを断って、1回も撃ったことがなかったんですけれども、銃を与えられて、2、3発その場で練習をさせられて、それでその両親を娘の前で殺すわけですね。その後、妻も生命の危険を感じて逃げてしまいます。ルワンダが平和になって妻が戻ってきたとき、新政権がそういう虐殺の責任追求をやっていたため、彼は捕まります。彼は殺人罪で裁判にかけられて、有罪判決が下った。無期懲役ですね。そういうことです。彼のコメントは、妻を今でも愛しているのでやり直したいということでした。妻のコメントは、顔も見たくない、というコメントが出ていました。

こういう、家族に家族を殺させるという悲惨な出来事は非常にたくさん起こっているんです。つまりこういう残忍さというのは、さっき

栗本さんは戦争過程、日本の戦争の過程で起きたこと、あるいは韓国やベトナム戦争であったこと、ということを具体的に言われましたけれども、それが現在、今この時もアフリカで進行しているのです。それもアフリカの場合には、犠牲者の数が桁違いに多いにもかかわらず、それがほとんどニュースにならないという現実があります。人口の1割が殺されたり、人口の3分の1近くが国から逃げて難民になるという状況が起こっている。このような残忍な暴力の現場を、我々はアフリカに行くと目にします。松田凡先生が行ってるエチオピアでもおそらく同じようなことが起こっていると思いますけど。武器が日常で手に入りますから、子供兵士がいて、周りにいっぱい死があるという状況が日常的に存在します。それは非日常の3年とか4年の戦争期間ということではなくて、もう生まれてから20年、30年という状況で混乱が続いている社会も少なくありません。

もちろんこうした状況を改善するためにいろんなNGOが入っていったり、人権団体が入って来たり、あるいは欧米のプレスが入って来ますけれど、彼らの側にも問題があることも間違いないですね。例えば、そういう残忍さはアフリカ人の生まれながらの性格と結びつけられて報道されます。それを笑いの対象や嫌悪の対象にしてしまうということが我々の周りでもあります。例えば、去年死亡したウガンダのアミン元大統領の行状について映画がつけられました。もともと原題は『Rise and Fall of Idi Amin』っていう、『イディ・アミンの盛衰』という映画ですね。日本に来た時は『食人大統領アミン』という名前で公開されました。そういう形でアフリカの残忍さ、残酷性、野蛮さというのを「当たり前」のものとして受け入れる素地が我々にあるように思われます。

栗本さんに、ひとつお聞きしたいことがあります。アフリカ社会においては非常に深刻な民族同士、あるいは隣人同士の殺戮、しかも大量で残忍な殺戮が行われて、社会の中に大きな裂け目を作り、傷を作っています。こうした傷あとはいかにして修復が可能なのでしょうか、と

いうことです。通常の法的な解決の仕方というのは、犯人を特定して、法廷で裁いて、処罰をする、罰を与えるというものです。あるいはそれとは別に、犯人に向けて私的に復讐するというやり方もあるでしょう。アフリカで伝統的に行われていたやり方は、犯人を処罰するのではなくて、牛とかヤギとかを、当事者の属する集団の間でやり取りをすることによって傷を修復しようというものでした。もちろん正解というのは何かあるわけではないですが、栗本さんご自身の経験の中で、これだけ深く切り裂かれた裂け目というのはいかにして修復することが出来るんだろうかということを聞かせていただけないでしょうか。

例えば、南アフリカでやったような真実和解委員会（TRC）ということも可能性のひとつなのでしょう。南アフリカだけではなく、グアテマラや東ティモールにおいても実践されています。TRCというのは、法廷で裁くのではなく、被害者と加害者が共に現実にあったことを告白をして、許しあう、そして癒しあうという試みです。法廷によらない傷跡の修復ということに対しては、たくさんの批判が寄せられていますけれども、色々な形で実験がされています。栗本さんが調査をつづけてきたスーダンという社会も、もう1970年から延々と、暴力的に引き裂かれてきた経験があります。こうした社会の傷はどのような形で修復されるのかということについてはどうお考えでしょうか。

次に野田さんにお聞きしたいことがあります。それは法の支配に関連しています。法の支配ということばは何か非常に良いもののよう聞こえますが、実はあやういものであるということは、先ほど野田さんが言われたように、日本がかつて戦争中に行ったことを考えればよくわかります。例えば、朝鮮人に対する強制連行や、強制徴兵は、合法的に行われていました。徴兵令という法律を作って行われた。つまり法の支配を認めてしまうと、合法的に行われたことを裁くことはむずかしい。実際に、日本が戦争中に中国人とか朝鮮人に対して行った様々なことについて、その責任を問う裁判をみればイ

メージがわきます。そういう戦後補償裁判というなかで全面的に勝った例はありません。唯一、部分的に責任を認めた例が数件。でもそれを認めた地裁の裁判官はすぐに飛ばされてしまいました。もちろん二審では文句なく負けました。なぜ負けたかという、それは合法的だったからということです。

どういう論理かと言いますと、こういうことです。戦争中の法秩序の根源は、大日本帝国憲法です。大日本帝国憲法には、国家賠償という考え方はないんです。今でしたら、道路やダムを作ったりする過程で国がおかしなことをしたら国家賠償法で補償を国に対して請求します。国が間違ってるという考え方です。ところが大日本帝国憲法下においては、国家賠償というコンセプトは存在しません。なぜなら大日本帝国というのは天皇の国家です。その天皇は神であり、神は誤りを犯しませんから、国家に賠償金を請求できないという論理なのです。冗談みたいな論理ですが、これが新憲法下の最高裁の判例として確定されているものですから、どんなに朝鮮人の被害者が、戦争中にこんなことをされたっていう裁判を起こしても、それは法的には根拠がないという理由で負かすことができるのです。それが法の支配です。ですから文明化と法の支配というのはなかなか難物なんですよ。

その難問を考える際に気になるのが、近年氾濫している心の問題です。制度や法とかではなく、心の問題というふうに還元して問題を位置づける動きがあります。心の時代とかもいわれます。野田先生はこう見えても精神科のお医者さんですから、このことについてお聞きしたいのです。法の支配というのもあやういものですが、心の支配ということもまたあやうさを秘めています。結論から言うと、それはある意味でより危険なものでもあると思います。例えばこれは私の友人の中学校の教員から聞いたのですが、クラスに在日朝鮮人の子供がいて、学校の書類のなかにあるのが元号だけなのはおかしいと言い始めた。1910年以降の日本の朝鮮に対する植民地支配について、様々なところで、おか

しいということを主張し始めた。そうすると先生が来て、カウンセリングをしてくれるというのです。カウンセリングのプロがこの場に何人もおられると思いますけど、その子からしてみると、別に心に傷があるわけではなく、それは心の問題ではなく、日本という社会の問題だというふうに思うかもしれません。でも、心というレトリックは、ある意味危険なところがあって、心をケアする、心をサポートする、心を癒すっていう形で様々な傷を議論する時っていうのは、非常に慎重にやらないといけないと思います。これからは、心の支配っていうのが逆に登場するのかもしれないからです。そういうような危険性を感じてしまいます。ですから心というものが語られる現状について、そういったものを取り扱う時の留意事項に関して、野田さんにお聞きしたいと思います。以上です。

日野：

お答えもお願いしたいのですが、続きまして川畑さんをお願いします。

日野：

ありがとうございました。お二人のコメントについて、栗本さん、それから野田さん、短い時間ですが、よろしくお願いします。

栗本：

はい、では簡単に。まず最初に、野田さんが近代日本の話をしてくださって、私、大変良かったなと思ってのんです。例えば、日本人が野蛮なことをやってたのは60年、70年前までで、今はしてないと。それに対して、アフリカでは現在でも戦争が行われていると。こういうふうにと考えると、大変な、間違いだと思うんです。野田さんのお話を聞いていて僕が感じたのは、日本の場合は1945年以降に、ちゃんと清算というのをしてないので、要するに状況次第で、私達もまた同じような過去にあったようなことをやる可能性がある、ということを認識するというのが非常に大事なのではないかと思いました。そういうふうにと考えることによって、例えば残虐な行為の問題も、全く他人問題ではない問題として考えることができるんじゃないかと思います。

松田さんの質問ですけど、これは実際本当に大変難しい問題で、南アフリカの場合は要するにネルソン・マンデラという大多数の人が尊敬しうる人物が政権を執ったので、うまくいったということがあると思います。それに対して、無茶苦茶な人権侵害、あるいは残虐行為を重ねてきた武装組織が政権の座に就くということが、まああるわけですよね。リベリア、シエラレオネもそうですけど。そうすると、正義を行うということが非常に難しくなる。つまり人権侵害を行った、酷いことをした人はやっぱり処罰されなければいけない。法の支配でないといけないんだけれども、それと和解、あるいは許すということを、どの辺で両立させていくかという問題があります。どこかでそれをバランスをとって両立させないといけない。その時に、例えばスーダンも、たぶん今年中に包括的な平和協定が結ばれて、一応平和になると予想されているんですけども、その時に指導者が、やはり政府軍なり解放戦線なりが、過去に色んな過ちを犯してきたということを公式に認め、犠牲者に対して謝罪するということがやっぱりどうしても必要なんですね。今まであんまりそういうことはやられたことないんですけど。その上

で国民に和解と許しを求めると。私は個人的には、紛争終結後の国では、指導者というものがそういうことをしてほしいなと思ってのんです。そういうふうに見える見識というのを指導者が持っているかどうかは、ちょっと保証はできませんが。しかし、実現すれば、非常に重要な第一歩になると思います。それ以降のことは、どうしたら良いかという処方箋は、よくわかりません。どの国にもどの状況にも通用する処方箋ってないんですよ。

日野：

では、野田さんよろしく。

野田：

栗本さんのお話を聞いていて、日本の場合とアフリカの場合と、栗本さんの話とすり合わせるとしたら、それこそ彼が、松田君の『呪医の末裔』の書評を書いたんだけど、ここで栗本さんがアフリカというのを多民族と多文化の共存、移動の中での共存というのをずっと書かれているわけだけれど、それをどう解釈するかということで栗本さんは、ポスト国民国家っていうことを紹介して言いました。日本の場合は一応、内なる残虐性というのは内戦状況でやっているわけで、外に出た時に外部を発見しようとしたわけですね。ヨーロッパ列強っていう外部を発見して、列強の目を見た文明の戦争というのを考えようとしたわけです。だけど列強からの目がない時はですね、やっぱり内部の目です。内部の目をつくるために、アジア人の蔑視というのを徹底してつくっていくわけです。まだ最初に大陸に出ていった場合は、中国文明への尊敬が、おぼろにあるわけです。中国は文明国である、自分たちが学んできた。朝鮮に対してもそうだけど、それを期待する。福沢諭吉なんかそうですね。しかし勝手な期待から失望へ変わると、近代化・西洋化をしないやつは劣っているんだという形で侮蔑していく。この悪循環をずっとやってきたわけです。

これは、今でも同じです。戦後の中国でも、日本人企業経営者で中国へ出ていった人が何を

やっていたか。まったく戦争犯罪についての教育もないからよく認識してないけど、一応頭の中では日本が悪いことをした、だからなんか尽くさないといけない、なんていうことを思うわけですね。で、そう思って、工場を造ったり色々するんだけど、技術を盗まれた、とか言ってね。そして彼らは信用置けないということで。そして、この循環のプロセスっていうのは全部、勝手に思い込みで外部のスタンダードを人に持ち込もうとして、それが幻滅すると、相手を内部化して、そして差別するということをします。アフリカの話は今、聞いていると、やっぱりアフリカの場合、そういう意味では、民族、部族間の移動が激しい中では、ボーダーとしての外部というのではない。だからそこで外の眼差しというのををつくることを必ずしもしていなくて、やっぱり内部の戦争という意味では、日本がずっとやってる、日常的にやってるのかなあという感じがしますね。

あと、松田さんが言ったのは、私がなんか言ったこじつけで、法に対して心と言ったけど、私は法に対するものが心だと思ったことはありません。法っていうのはやっぱり国家のつくった暴力ですから、法に対抗するのはやっぱり力ですよ。だからその辺、やっぱり裁判でも戦後補償でもそうですけど、法に対抗してさしあたって裁判を訴えてるけど、基本的にはその裏にあるのは、そういった法をごまかしている権力に対する民衆の戦いですね。だから必ずしも僕は、法に対して心という、要するに心というのはやっぱり法の側、権力の側が使ってることだろうと思います。こういう対立があったときに、話し合いをするとかなんとかいうのは色々な形でやられています。

お互いに自分向きに話をしていることを、相手の前で話をするということは大事なことです。日本の国家主義の勢力は国内向けに日本の栄光を言っているんだけど、外に向かってはまず、ほとんど言うことができませんね。そういう感じで、アジアについて全然私達は会話をしようとはしていない。本当に話し合うというのは、自分が内向きに言うんじゃないくて、加害を

加えた側に対して、自分達がどういう思いでいるかをちゃんとと言わないといけないし、それから相手の側もちゃんと聞く。相手の側の言うこともちゃんと聞かないといけないんです。それは、栗本さんの言っている謝罪の条件です。謝罪というのは当たり前のことだけど、悪いことをした人が全く自覚がないのに頭だけぺこっと下げられると馬鹿にしているということになります。それは謝罪ではない。謝罪というのは何が起こったかをきちっと加害の側が言う。そしてそれに対して、相手側が深い反省を聞くという会話のプロセスが必要です。

例えば、カーター元アメリカ大統領が、エストニアとかキプロスで対話をうながすプロジェクトをやっている。エストニアとロシア、ペテルスブルグの国境地帯で、両方の住民の代表と、それから政治家とか外交官とか呼んで、1週間合宿をやっているんです。この経費はカーター研究所が出す。そこで自国民用に、例えば、エストニア政府の人達があまりにロシアは酷いとか言ってたことが、ロシア側に向けて直接言うことによって、自分の言ってることの意味をもう一回確認する。そこから対話が始まる。私達はアジアにおける問題でもそういうことが非常に大事なことだと思います。

心の問題で言うと、私は正直言うと、臨床心理学というのは虫が好かんグループだとは思ってませんで、こと人間の心の問題っていうのはやっぱり、内部の問題というのは、もちろん生活的に本来は自覚していく必要がありますけども、社会的な関係において私達が生きていくことの勇気だとか、希望とかいうのは他者との関係の中でつくられるんです。他者に向かっていくことを勇気づけ、支えていくのが必要であってですね。自分の内面の中に何か問題があるかないか、ということですね。しかもそれが権力の関係で、自由意思を踏みにじって、反省して生きなさい式の関係でね、自分の内面を見ろということにすれば、その人は萎縮していくだけです。そういう意味では、先ほどの質問では、法をつくる側、権力の側が今、心というのを言っているんであって、心というのはやっぱり

り自分の中にあるのではなくて、人との関係の中で、広がっていく中でつくられていくものだと思います。

日野：

はい、ありがとうございました。司会者の権利として、2つだけちょっと言わせてもらいます。1つは、アフリカの問題が出されたんですが、実はアフリカのああいいう内乱で使われている武器は、おそらく99%はヨーロッパとかその他の文明の所産です。それが1つ。それから2つ目は、先ほど野田さんが言われたように、日本は文明、文明ということで、いわゆる先進文明国を模範にしていたわけですが、その文明国もベトナムやアフガニスタンや、あるいはイラクで同じことをやったという、その辺りがやはり問題ではないかと思います。

時間があと5分ぐらいしかないんですが、やはりフロアからお一人、二人、コメントかご質問頂きたいと思います。挙手をお願い致します。はい、どうぞ。

松田凡：

京都文教大学の松田です。栗本さんのレジメの一番最後のところにありました、多民族・多文化の共存、アフリカの伝統というお話、私も、基本的にはこういうことがあって欲しいと思って、考えているものです。私の場合は、松田素二さんもちょっと触れて下さいましたけども、エチオピアの西南部をずっとフィールドにしまして、そこでの紛争の研究ということでは、京大の福井勝義さんを始め、幾人かの方が研究論文を出しておられる場所です。私もそこで機関銃の調査をしてまして、村で、三人に一人ぐらいの数のカラシニコフ銃がある。そういう報告をすると、いかにもここで語られている残虐性の、ひとつの指標になるかのように見えるんです。しかし私は長年そこで調査しておりますが、栗本さんのレジメに挙げられたような残虐性、あるいは野田さんが触れられました、日本の兵隊が大陸・中国でやったような残虐性には、実を言うと出会ったことがないです

ね。それは私の認識不足なのかも知れませんが、私の考えを言いますと、多民族・多文化の共存ということは、別に紛争がゼロとか、全くそこに争いがないということではなくて、緊張を孕みつつ、何かそこに人間の尊厳というのを彼らが認め合っている、そういう状況を考えております。ですから武器も確かにたくさんあって、時々小競り合いも起こるわけですがそれでも、ここで述べられているような残虐性というものは、私自身はあまり観察例がないんですね。

ひとつ思いますのは、例えば国家であるとか正義であるとか、あるいはゲリラもまた国家の裏返しという意味ではこのカテゴリーに入ると思うんですけど、人間はそういう大義名分を持った時に、すごく残虐性が発揮されるという仮説はどうなんだろうかということ、もしどなたかお答え頂ければと思うんです。私の調査しているところではあまり国家というようなものは、少なくとも戦争の現場では彼らは背負っていませんし、民族というものも背負っているように見えない。彼らはもっと個人的動機で争いに行っているような気がするんですね。自分の親族が殺されたから、1人で仕返しに行ったというような話を私もよく聞きます。それが役所に報告される時にはA部族とB部族の紛争という形で報告されます。ところが実際の文脈を見ると、かなりその当事者の個人的報復で行くわけですね。その中では人を殺すことに対して、先ほど人間の尊厳と言いましたが、その裏返しだと思うんですけども、当事者はものすごい恐怖を持っているわけですね。ですから人を殺して帰ってきたら、半月ぐらいは体中着飾ったりして、自分のものすごく興奮した状態を表に示して、それを周りに収めてもらおうとしているんじゃないかと私は思うんですけども、とにかく異様な状態でおります。それだけ人を殺すということに、個人的な、はげしい恐怖というのを感じているんだろうと思うんです。それが例えば国家とかゲリラとか正義というものを人間が背負った時に、平気で残虐性を発揮できるという仮説を、今日お話を伺いながら考えて

いたんです。それについてお考えを言って下さる方があれば、お伺いしたいと思います。

日野：

はい、どうぞ。

川畑：

私もすごく賛成です。私の仮説の中では恐怖の否認ということと、それからパラノイド、つまり脅かすものが外にあるとして不安に対処しようとするメカニズムが関係しているのではないのでしょうか。そういうような極限状況の中で起こってくるものは非常に残虐性を人間に帯びさせるんだと思うんですけども。ただそれは、個人の病理というふうに言うべきか、あるいはさっき言われてましたように、大義名分を持つというような形の文化、恐怖心を否認するための集合的なメカニズムなど、その人間達を取り囲んでいるシステムというものを考える必要があるんじゃないかというのが私の考えです。

日野：

ありがとうございました。まだ色々あるかと思いますが、一応ここでお開きに致します。今日は皆さん、熱心な二人の発表とコメント、それから皆さんからあんまりご意見とか聞ける時間がなかったんですが、今日は本当にどうもありがとうございました。

(了)